〔論説〕

# 現代性の古典学（3）

## ――ドストエフスキー『賭博者』――

與那覇　潤

### 一、勤勉と享楽

「だって、じっさいのところまだわかっていないわけでしょう、ロシア式のはちゃめちゃと、勤勉な労働によるドイツ式の蓄財法とでは、どっちが醜悪か？」[1]（五五頁）

資本主義の終わりが近づいている。しかしそれは、よく言われる意味ではない。天然資源の枯渇や、搾取された労働者の蜂起によって、資本主義が持続不能になる事態は、いまなお起きそうにない。だが資本主義の下で成功するのは勤勉さの証であり、価値のあることだとする信仰が、もはや維持できなくなりつつあることは確実だ。

そう指摘され始めたのは、わりに以前からである。冷戦の最末期にはすでに、実体経済から乖離し金融化した資本主義は、地球大の巨大カジノで賭けるルーレットに近づいたと言われた[2]。

まさにそれは、長らくマックス・ウェーバーの名で語られた「勤勉な労働によるドイツ式の蓄財法」としての、倫理と実業の一致がありえると夢想しえた時代の終わりだった。いまや資本主義の成功者たちは、努力家としての尊敬など集めず、カジノでひと山当てたギャンブラーのようにしか見られない。

しかしそれと対になるものが、「ロシア式のはちゃめちゃ」とは、どういうことだろう？

ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の初出は、一九〇四～五年。日本人になじむ表現で言えば、日露戦争の頃の著作だ。

だが先の引用の出典は、それよりもさらに古い。

著者はドストエフスキー。代表作である『罪と罰』と『白痴』に挟まる時期に、中編『賭博者』が口述筆記されたのは、一八六六年のこと。大政奉還の前年、文字どおり近代の夜明け前と呼ぶべき時期の作品である。

## 二、隷従と反逆

『賭博者』が描く時代は、期せずして二〇二〇年代の現在に似ている。

執筆の三年前にあたる一八六三年、すでに分割され事実上は滅亡していたポーランドで、民族主義者による「一月蜂起」が起きる。一年半の戦いを経てロシア軍に鎮圧されるが、西欧諸国は反乱に同情し、ロシアを非難した。[3] 二〇二二年に始まったウクライナ戦争の序盤と似た国際世論が、ヨーロッパに広まっていた。

『賭博者』で舞台となるのは、ドイツの架空のカジノリゾート「ルーレッテンブルグ」だ。フランスで金策を果たしてから戻ってきた、ロシア人の主人公は、雇い主の前でこうぶちまける。